

レイモン・ブードン社会学

——80年代の著作を中心に——

近畿大学 山下雅之

ブードン先生がなくなった。本年4月のことである。その後に奥様より通知のお手紙をいただいた。ソルボンヌで教えを受けたブリコー先生、2002年のブルデュ、そして今年またブードンとクロジエ。20世紀フランス社会学を形作った方々のうちトゥレーヌは存命と聞くが、世代の変化である。今後はベルナル・ライール、オリヴィエ・ガランらが担うことになるだろうか。社会学の理論的系譜は、真摯な批判、反省、理論再構築の作業を絶えず繰り返さなければならない。パーソンズが有名と聞けば紹介し、ハバーマスが出れば輸入し、ブルデュが流行し、流行が終われば消えていく・・・、これでは社会学の理論的深化は生まれまいだろう。なぜ彼らの理論は有効だったのか、どこにその限界があったのか、反省と深化がなければ科学は成り立たず、社会学もその例外ではないのだが

レイモン・ブードンは数理社会学やブルデュとの機会の不平等をめぐる論争で知られているが、中期80年代の著作から舵を切り、『La place du desordre』(1984)では社会科学の説明原理に見られる欠損や飛躍、過度の一般化などの論理的批判を焦点に据える。ブリコーとの共著『批判的社会学辞典』でもその鋭い舌鋒はよどみない。社会学の大家ですらその俎上ではまな板の鯉である。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』について、トレヴァー＝ローパーの論を援用しつつ次のような意味のことを述べている。カルヴィニズムの教義が資本主義の発展をもたらしたとするウェーバーの考えが社会学において定説となっているとしても、15世紀の冒険的企業家と16・17世紀の資本家たちとはどこでどうして質的に変わったのか？カルヴィニズムを信じたことだけがその理由なのか。実際にヨーロッパのどの都市に住むどのような事業を営む経営者たちがどれくらいプロテスタントだったのか。結果として「ウェーバーの考えたことが起きたとしても、宗教教義と資本主義企業家の発展という異なる二つの次元の関連は、歴史的にはるかに複雑なものだった。」(la place, p. 159) トレヴァー＝ローパーによればアムステルダムやアントワープにカルヴィン主義の企業家が集まり、資本主義的経営へと向かったのは、宗教改革を弾圧する勢力のため彼らがこうした都市へと移動した結果である、と考えられるのではないか。

その後ブードンは『L'ideologie』(1986)や『L'art de se persuader』(1990)において、社会現象を読み解く理論の側ではなく、行為者そのものへの指向を強め、非合理的な行為と見える選択をおこなう行為者の視点に身を置き、それが一定の性向や情報の制約の中でのベターな選択であることを解き明かそうとする。惜しみなく、限りなく合理性を追究しようとする、しかし柔軟なブードンの視線に、合理的な避妊法を受け入れない60年代インドの農民たちや、収穫量に応じた地代の変更をよしとしない明治期の日本の地主たちが登場して、19世紀末のブラジル東北部で灌漑農業が社会の停滞を生んだ理由などが心地よく解き明かされ、無尽蔵ともいえる博学な批判社会学が、この時期のブードン理論の源泉となっている。

さあ私たちも、社会学を建設的に、流行した理論の残骸ではない構築された台地に、少しずつ立ち並べていきたいと思う。それが生産的なパラダイム転換に基づいた通常的科学であるために。